「ことばの教育」パイロット校事業　報告書

学校名	福山市立深津小学校
校長名	野 田　 直 樹
所在地	福山市東深津町二丁目５番１号
ＨＰ	http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shou-fukatsu/
学級数	１８　学級
タイプ	Ⅰ　・　Ⅱ

１　研究の概要

（１）研究主題

「自ら学ぶ」力の育成

―ことばの力に裏打ちされたコミュニケーション力と多様な表現力を育てる―

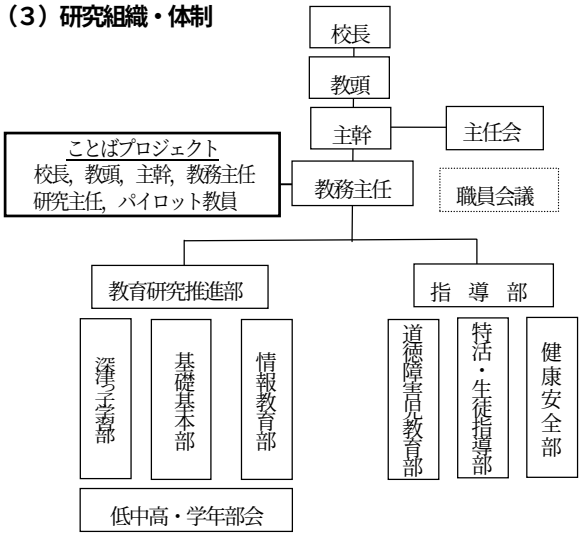
（２）研究のねらい

本校は，国語科や特別活動を中心にして，コミュニケーション力の育成に重点をおいた教育研究を進めてきた。情報収集としての「読む・聞く」情報発信としての「話す・書く」などの基本的な「言語技術」の習得を通して，学習や日常生活に必要な次の４つの「ことばの力」を育成することを目指している。

① 事実を分かりやすく正確に伝える力
② 相手や目的に応じて適切に伝える力
③ 聞いたり読んだりしたことを正確に理解する力
④ 筋道立てて考え，論理的に表現する力

これらの力に裏打ちされたコミュニケーション力と学校生活全体での多様な表現力を育て，「自ら学ぶ」力を育成する。

（３）研究組織・体制



２　２年間の取組みの概要

（１）「ことばタイム」

① 教育課程の中に全学級週１時間の「ことばタイム」を特設し，「ことばの教育」パイロット教員と担任がＴＴで「言語技術」の指導をする。

② 「言語技術」の指導としては，受け答えをする技術である「問答ゲーム」を基本とし，要点をまとめる技術（再話），構成を考える技術（文章の構造分析），情報伝達の技術（描写・説明），認知の技術（視点を変える），情報分析の技術（絵の分析・文章の分析）を，学年の発達段階に応じて行う。

③ 「ことばの教育」年間指導計画を作成し，児童の発達段階に応じた「ことばタイム」の内容を作り出す。

（２）授業の工夫

① 「言語技術」を取り入れるために，全教職員で以下の４点を意識統一した。

ア 全教科・領域で「ことばの力」を育成していく。
イ 言語技術を生かせる場（授業・生活）を工夫する。
ウ まず，『型』を指導していく→定着したら，場や相手や目的に応じて，変化・応用などを工夫させる。
エ 「ことばタイム」での学習を，教科等のねらいを達成するために生かす。

② 「言語技術」を授業で活用するために，全教職員で以下の１０項目を確認した。

ア 単語で発言させず，整った文で最後まで言わせる。
イ 主語をつけ「自分の意見であること」を意識させる。
ウ 同じ考えでも，各自に発表させる。
エ 結論先行型の発表を進める。
オ 根拠を明らかにさせる。（どこから？　なぜ？　そう考えたのかなど，聞き返して根拠をもたせる）
カ 自分の考えをもたせる場を設定する。
キ 考えを伝え合う場を設定する。
ク 書く活動を工夫する。
ケ 構造的板書を工夫する（学習のあしあとが分かる板書の工夫をする）
コ 言語環境を整備する。（学習のめあて・流れ・あしあと・ゴールなどが分かる掲示の工夫をする）

（３）特別活動や行事

① 集会活動の司会等に効果的に取り入れ，分かりやすく多様な表現を工夫させる。

ア 集会委員の司会の言葉にナンバリングを取り入れ，聞き手に分かりやすい進行をさせる。
イ 発表したことに対する感想を聞き手に求め，その感想に司会者がコメントを返すことで，相互に認め合い，かみ合った話し合いができるようにさせる。
ウ 委員会活動の紹介やお知らせは，ことばによる説明だけでなく，動作や劇を組み合わせて，分かりやすさや楽しさを意識した発表をさせる。

② 行事の中に，ことばを意識した発表の場を設ける。

ア １学期体育発表会・２学期音楽発表会・３学期「私の夢」発表会の各行事の司会や発表内容に，受け答えや情報伝達の技術を活用させて，分かりやすくさせる。

イ　児童会行事等の企画や司会進行で，相手や場面を意識した表現をさせる。

（4）「ことばの力」を意識させた学校生活

①　相手意識・場面意識をもたせることで，職員室や事務室等への入室の仕方や来校者への対応の仕方を指導していく。

②　児童会役員・放送委員・集会実行委員等の発表や話し方を全校児童のお手本として位置づけ，自分たちの発表に取り入れていくように指導していく。

③　高学年をリーダーとするあいさつ運動や縦割り掃除の取組みを通して，異学年間のコミュニケーション力や説明力を育てる。

（5）校内研修

①　演習型の校内研修を仕組み，教職員が同じ授業イメージをもてるように「言語技術」の学習を体験する。

②　問答ゲームや再話などの基本的な技術を中心に，指導内容や指導案を作成する。

（6）「言語技術」指導の普及

①　文部科学省学校視察や福山市長期研修生・市内外の学校視察を受け入れ，「言語技術」指導の趣旨を説明した。

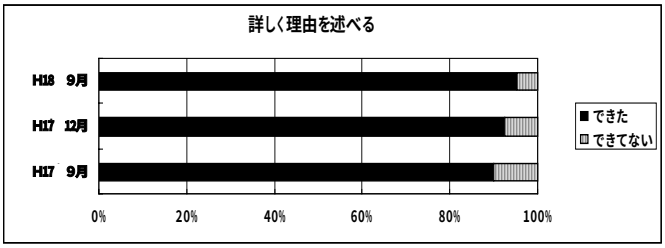
②　「ことばの教育」パイロット教員が，広島県福山教育事務所・福山市教育委員会主催の研修会や授業改善フォーラムなどで「言語技術」の演習や提案を行った。

③　「ことばの教育」パイロット教員が，福山市内外の，２５の小・中学校で講師として研修に参加し，「言語技術」の演習や模擬授業を行った。

3　研究の成果と課題

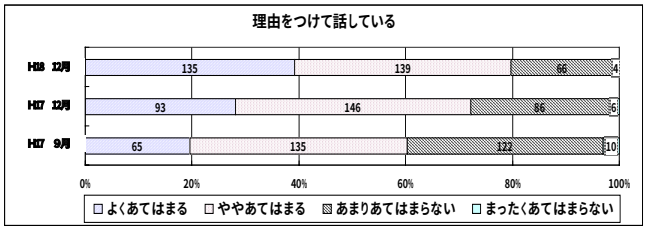
（1）成果

①　問答ゲームで理由を詳しく述べる力が向上している。



昨年度９月・１２月・今年度９月に３年生以上の児童に行った紙上問答ゲームで，理由の書き方について比較したグラフである。自分の考えの理由を，相手を納得させることができるように詳しく書いている児童が，９０%から９５%になっている。これは，自分の考えに分かりやすい理由を付けて言おうとする意識が定着しつつあることを示していると考えられる。

②　理由を考える意識が向上している。



昨年度９月・１２月・今年度１２月に３年生以上の児童に行った意識調査の変化である。考えと根拠のつながりを意識しながら学習したり，発表したりする姿勢が少しずつ向上している。これは，『型』を導入することで，児童たちに考える筋道が定着しつつあることを示していると考えられる。

③　児童たちが，整った文で・根拠を付けて・相手に分かりやすく自分を表現しようとすることが増えた。

ア　授業で発言するときは，低学年から単語だけでなく主語を意識して整った文で言おうとしている。

イ　児童集会などで，意見や感想を求められたら，その場で考えて発言しようと挙手する児童がふえた。

ウ　児童会役員選挙で，ナンバリングとラベリングを組み合わせて，分かりやすい演説をすることができた。

エ　ナンバリングを使ったほうがよいと思う場合は，児童自らが考えて有効に使えるようになった。

例　4年生以上「この単元の学習で身に付いたことのまとめ」をするとき

2年生以上「１学期に頑張ったこと」「今年の抱負」などの作文を書くとき

④　全職員が，全教育活動の中で「ことばの教育」を意識するようになった。

ア　授業で，児童の発言をよく聞くようになり，足りない部分やあいまいな部分を聞き返す。

イ　職員室への入室などで児童がきちんと言えたら，その場でほめ，足りないときには言い直させる。

ウ　分かりやすく要点をまとめた話し方をする。

⑤　参観日ごとの保護者アンケートによると「ことばの教育」に対する意識が，肯定的になってきている。

【保護者アンケートより】
・単語だけで会話せず，最後まで文で言うことが増えた。
・「ぼくはこう思う」とか「どうしてかというと」などのように言えるようになった。
・自分の考えをはっきりと他人に伝えることが要求される社会になっている。今の時期からその訓練をしていくことは大切だと思う。
・「ことば」は社会に出ても重要なことなので，これからもぜひ続けてほしい。

（2）課題

①　「言語技術」の効果的な活用について，今後も研究を推進していく。

②　「言語技術」研修の充実を図り，教員の指導力向上に努める。